

座談会50周年を振り返って



司会（宮城清次郎）

皆さんこんにちは。せっかくの休みですが、ご出席いただきありがとうございます。ご承知のように、浦添市体育協会50周年記念事業の一環として、記念誌を発行する計画をしております。記念誌の中で浦添の村時代から、スポーツについて最も関わりのある方々に本日は出席をしていただきました。これを記念誌に載せ、後世に残し、今後の資料にと考えております。

座談会を始める前に、現浦添市体育協会会長の宮城清吉氏にご挨拶をいただいてから、始めさせていただきます。宮城会長よろしくお願ひします。

宮城清吉

本日はお忙しい中、お集まりいただき誠にありがとうございます。浦添市体育協会の創立50周年という、記念すべき節目の年を迎え、記念誌を発刊いたしますが、体育協会の歴史を後世に残そうということで、体育協会と共に歩んでこられた皆さんにお集まりをいただきました、皆さんの思い出話、そして苦労話などがたくさんあるかと思しますので、ざっくばらんに和やかに、座談会を進めていただきたいと思います。簡単ですが会長の挨拶に代えます。よろしくお願ひします。

司会

それでは、座談会に入らせていただきますが、出席者の方々を紹介させていただきます。

まず最初に、戦後間もない頃から浦添村の青年会会長としてご活躍いただきました、宮城豊さんです。

次に沖縄の陸上競技のトップランナーとして数々の金字塔を打ち立て、さらに本協会の会長として市スポーツに尽力された佐川正一さんです。

それから、本市より初の教員バレーボールの一員として国体に出場し、さらに陸上、特に跳躍で活躍するとともに、本市の9代目会長をお勤めになりました富本祐憲さんです。お隣が沖縄のバレーボールの名アタッカーとして、県内敵なしを築き、また、県庁に勤めているときには、青少年のスポーツ振興にもご尽力いただきました石川晴祥さんです。

次に、ハンドボールを短期間で全日本のレベルに到達させ、数多くの名選手を育成、自らも選手として、国体或いは市のハンドボールのポイントgetterとして県民大会などでも大活躍をされ、今般はU-16の日本代表監督に決まりました東江正作さんです。それから、元々は陸上競技の選手だったのですが、高校入学後、ウエイトリフティングに転向し、その素質に恵まれ、次々と記録を更新、日本一の榮譽を担い、現在は現役として、また高校での指導に余念のない比嘉敏彦さんです。

次に、浦添市の社会体育の向上に目を向けられ、体育指導委員の団結或いは資質の向上、さらに本市の11代目体協会長として活躍された前会長の与座武治さんです。以上の方々にお集まりいただきこれから座談会を始めさせていただきます。

なお、この座談会の進行は10代目の会長を経験し、出席者の中間的な立場にある宮城清次郎



が担当させていただきます。よろしくお願いいたします。

それではまず、宮城豊さんにお話を伺います。戦後間もない頃、村の青年会を発足し、会長職を引き受け若者の団結を訴えました。その時の活動状況や、或いは当時の陸上競技の開催などについてのお話をお願いしたいと思います。よろしくお願いいたします。

○青年会活動とスポーツ

宮城 豊

当時（1952年）からすると年月がかなり経過している思い出せない部分が多くて状況をよくご説明できないと思いますが、当時、なぜ青年会にスポーツが必要であったかと申しますと、終戦間もない時で生活も不安定で、将来に向けての希望も見いだせない時代でした。青年会組織については、当時の人々は非常に無関心だったんですね。戦後いち早く青年会はできたようですが、私が知る限りでは有名無実の状況で、どうすればこの組織を盛り上げ、青年諸君がこの青年会組織活動に参加してもらえるかということのために、一番気を配ったのがスポーツの導入でした。特に野球、排籠球の三つの球技を取り入れました。当時、「浦添間切りは13番」と言われていました。浦添13番というのは、中頭郡13の村の内、そのしんがりだということです。「浦添間切りは13番」という言葉が流行るほど、浦添はスポーツの面では非常に遅れていたんです。ですから、スポーツを普及させることが一番大事だろうと思いました。そのための方策として取り上げたのが、いわゆる部落対抗です。対抗意識を高めることが一番大事だと思いました。陸上競技、野球、排籠球でもそうですが、各部落の青年会長に対して、是非選手を出してくれというお願いをして廻りました。

その結果、急速に青年会の皆さんがスポーツ

に対する熱意が高まってきたことは事実です。早速、昭和27年のコザ地区、今の中部地区において、女子チームが陸上競技で優勝しました。



浦添村青年会排籠球選手 1953年5月30日撮影
写真提供：宮城豊氏

その翌々年の昭和29年には、男子チームも陸上競技で優勝しました。あのときは富本祐憲君たちが随分貢献した方ですけども、特に佐川先生は100mでトップを走っていた。そのようにして浦添は、急速にスポーツが盛んになり、他村の人達は、皆、目をみはりました。野球でも、嘉手納チームとやりあった事があった。嘉手納チームはかなり強い方だったから、最初は浦添なんて軽くみていました。ところが、そのうちに競り合うようになり、勝負では負けたんですけども、浦添のチームが急速に強くなったということで、他村の人達がびっくりするほどだったということを今でも覚えております。

何故、急に強くなったかといいますと、当時人々は本当に食うや食わずの状況で、生活面でも非常に不安定だったのに加えて、娯楽に飢えていたことと、みんなハングリー精神が旺盛であったことが、主要因だったのではないのでしょうか。皆さんの意気込みや熱意が盛り上がり、いったことに伴い、各地域の競争意識が高まり、スポーツに対する練習熱を刺激して、技術の向上をもたらしたと思います。そして勝者に対しては、広く顕彰するなどして、慰労会を催したりしたものです。そういうことで急速に浦添でスポーツが盛んになったことの、大きな背景じゃないかと思うんです。スポーツ振興はできるだけ競争意識を高めることが大切だというこ

とを今でも思います。

私がアメリカに留学したのは1959年でした。当時は、アメリカの青年や大学生が、1mも幅跳びできないくらい脚力が弱かった。そのわけは、トイレに行くのも車を利用するくらい自分の足を使わなかったのが原因です。私はそれを非常に笑っていたんです。ところが今日、車社会になり、我々も足を使わなくなってしまうました。従って、今後はスポーツ振興について、お互い大いに頭を使って、対処する必要があるんじゃないかということ、今私はつくづく思っております。以上です。



胡差地区陸上競技大会浦添村女子陸上チーム優勝
記念撮影（1952年10月26日） 写真提供：宮城豊氏

○部落対抗

司会

青年会の団結によって、急速に浦添のスポーツが盛んになってきたというお話を、詳しくお聞かせくださいました。それでは次に佐川正二さんにお伺いします。当時、選手として大会に出場し活躍いただいたようですが、その時の練習方法や或いはあの頃、部落対抗で競争意識を高めていったようですが、あの頃の優秀な選手といえばどんな方々を思い起こしますか。

佐川正二

私は選手生活が長いので、一口に申し上げるのは難しいのですが、思い出すままにお話をします。

当時、村の陸上競技大会



は全て字対抗であり、自分のことで恐縮ではございますが、私は大平から100mと砲丸投げとリレーに出場しました。

100mでは字安波茶の宮城正一君とはライバルで、毎年2人で優勝を争いました。

沖縄の陸上競技大会は地区対抗で、浦添はコザ地区に入っていました。その後、郡対抗になり、中頭郡に変更になりました。そして、現在の市郡対抗に変わったわけではありますが、地区大会でも100mと砲丸投げに毎年出場しました。100mは地区大会では1・2位を競いましたが、砲丸投げは決まって3位に入賞しました。1回、野嵩小学校で行われたコザ地区大会では100mで負けたことがございます。その時はちょうど雨が降っていて、赤土のグラウンドはぬかって、私は素足だったのですべって走れませんでした。それで、宜野湾の選手に負けたんです。

これを宮城正一君が見て、スパイクに負けると言って、正一君はその年にすぐ軍のほうからラグビーボールをもらってきまして、首里の靴屋でスパイクを作ってもらいました。そのスパイクのお陰で、その次からは負けることは20代ではなかったと思います。その後、年齢別の種目が採用され、100m以外に走り幅跳び、走り高跳びと・・・それから円盤投げにも出場したことがあります。成績は地区大会また郡大会でも100m、走り幅跳び、走り高跳びは毎年1位、それから円盤投げは一時コザ地区で30代の記録を私が持っていたことがあります。記録は28mと短かったのですが・・・。

それから全島大会には毎年出場して、100m、



全琉陸上競技大会でコザ地区代表として入場行進する佐川選手（前列右端）

幅跳び、走り高跳び、いつも3位内には入賞しました。100mは20代から、他の種目は年齢別ができてから、50代になるまでずっと続けました。

それから、次に練習の方法についてですが、中学校に勤めていましたので、放課後は中学生の競技練習の指導があって、自分の練習はなかなか時間が取れなかったんです。5時半以降しか練習はできない。そこで、スタートダッシュの練習などは暗くなってからでは、危なくてとても難しくてできない。中学は教科担任制ですから、空いた時間がございます。その空いた時間を利用して100mのスタート練習をよくやったものです。

それから、終戦直後の校舎はコンクリートでも瓦ぶきでもなくて、茅ぶきで土間だったんです。雨降りなんかはその土間を使って腿上げの練習をよくやったんです。普通の練習の方法は100mから120mぐらいまでを10回ぐらい強弱をつけて流す。それから腿を上げる練習をしながら20mぐらい走ると、これも10回ぐらい。

それからスタートダッシュの練習、早く出る練習です。それとダッシュ後の前傾姿勢ですね、姿勢をなるべく前傾した姿勢で走らないと100mの決勝の付近で身体が起きて走れなくなりますので、その前傾姿勢をとる練習。これは前傾を長く保つ練習、そういう練習を繰り返していた。この練習の方法ですけれども、私は指導を受けての練習じゃなくて、自分の考えで、専門の先生の指導による科学的なデータなんかを基にして練習をしているわけではありません。自分で考えて練習をしていたわけです。

陸上競技大会では男女総合では小湾が飛びぬけて強く、何年か優勝が続いたと思います。その後、優勝を男女別に採点をして、男女別に優勝を決めました。そのときに大平が男子で優勝したことがございます。この優勝をするためには、相手の選手をチェックをするなり、いろいろな作戦を練ったこととは思いますが、当時は今と違って競技種目が非常に少なかった。それに

選手は2種目とリレーを兼ねることができると、6人が7人ぐらいの優秀な選手が揃えると有利でした。以上、自分でメモしておいたのをそのまま申し上げましたけれども、浦添はその頃から陸上競技が非常に盛んになったのではないかという気がいたします。

○第1回大会 司会

後程エピソードなどもお聞きしようと思ったんですけども、もうすでに佐川正二先生の今のお話からしますと負けた悔しさにスパイクを作る苦労話も披露していただきました。

それでは、戦後第1回目の陸上競技は、現在の浦添小学校の裏手の方の仮グラウンドで催されたことを記憶しておりますが、当時の実施された種目や、或いは選手などにつきまして、富本祐憲さんにお話をいただきたいと思います。

富本祐憲

第1回大会というのは、1947年の10月19日に行われたようであります。その当時、私は高校生でしたが、見るのは確かに見ました。



その大会には参加しておりません。7、8年前に私が市の体協会長をやっているころ、県体協の記念誌をつくるので、浦添市の体協の設立の経緯をまとめて出してくれという依頼がありました。当時副会長の宮城清次郎さんが中心となって佐川先生や西原正次さん、宮城豊さんなど当時にタッチされた方々にお話を聞いて、ここにまとめたのがありますので、説明します。

まず種目のことから申し上げますと、男子が10種目、女子が6種目だったというお話がありました。男子は100m、200m、400m、800m、1,500m、そして400mリレー、800mリレー、それに幅跳び、高飛び、砲丸投げ、以上だったと思います。これは定かではありませんが、だいたいそのようなものだったと思います。それが

ら女子は、60m走、100m走、200m走、そして400mリレー、幅跳び、高飛び、以上だったと思います。

それでは浦添市体育協会の設立の経緯ですが、まず青年会から始まって体育協会ができるまでを説明します。

村青年会による戦後スポーツの復興は、1947年2月に仲間収容所から各字への最初の移動許可が下りると、徐々に落ち着きが見えはじめた。それでも苦しい生活が続き、日々の暮らしに余裕はなかった。しかし、このような時期にスポーツ行事を開催して、若者達をはじめ、村民の志気を高めようと浦添村青年会、初代会長西原正次は1947年10月19日に各字対抗運動競技大会を開催しました。同大会は、浦添初等学校裏の窪地を整地して行われ、男子10種目、女子6種目の陸上競技が実施され、総合得点で字小湾が優勝しました。なお、各種目の優勝者は、同年11月9日に行われた第1回コザ地区各村対抗陸上競技大会に浦添村代表選手として派遣され、結果は12市町村の中で総合2位の成績でした。以後、村内では第6回大会まで村青年会の主催によって毎年盛大に開催され、スポーツ用具も十分に揃わない戦後は、まず陸上競技でスタートしました。当時楽しみの少ない村民にとって、年に1度の陸上競技大会は、最も大きな催しであり、楽しみのひとつでもあった。年々盛り上がりを見せ、応援にも熱がこもり、ドラ鐘や島太鼓を持ち出し、応援合戦を見るのも楽しいものでした。初期のころは小湾チームが常に勝っていたが、その後は実力が平均して大平、屋富祖、宮城、勢理客、伊祖、城間なども優勝した。これが青年会時代の陸上競技であります。

青年会から体協へ”1952年、昭和27年第6回大会が終わった頃、当時の村青年会長宮城豊氏は、浦添のスポーツの最高指導者である玉城幸男氏と相談をして、体協の組織を強化し、会長を与座成一氏、理事長に玉城幸男氏を擁立して、陸上競技などの開催を村体育協会に移すことに

おこりに存在した。

なった。年々盛り上がりを増した陸上競技大会は、各字とも優勝を目指して、栄養会で選手を激励し、配給物資のメリケン粉でてんぷらをつくったり、ときにはゆし豆腐やお汁粉が練習中の運動場に運ばれた。ある字では、おにぎりや刺身も用意され、大会直前にはどの字でも山羊をつぶしてヒージャー会を行うのが習わしでありました。村大会での優勝者はコザ地区大会へ派遣され、その活躍は目覚しく、1950年代に入って優勝するようになり、陸上競技は8ヶ年連続優勝の快挙を成し遂げ、陸の王者浦添の名をコザ地区の隅々にまで轟かす結果となりました。



1955年度 胡差地区体協陸上競技大会優勝記念
写真提供：宮城豊氏

1950年代は、バレーボールとバスケットボールも盛んに開催されるようになり、陸上競技に続いて、バレーボールもコザ地区を制覇し、全島大会でも優勝するようになりました。以上は県体協に報告したのと同じです。

司会

終戦間もない頃の陸上競技について、お話を伺ったんですが、話を前の方に戻しまして、戦前はどうかだったのかということで、お話しただけたらと思います。先ほど宮城豊さんから、浦添間切や13番というおことばをいただいて、浦添のスポーツが他の村からも悪いことばで馬鹿にされた、なめられていたんだということが伺えたんですが、戦前ではどういう種目があり、又、有名な方など佐川先生、或いは宮城豊さんあたりおわかりでしょうか。

宮城豊

佐川先生、戦前の種目、手りゅう弾投げとか

土のう運搬とか。

佐川正二

あれは一般ではなくて、中等学校の大会で手りゅう弾投てきと土のうかつぎとか、それから障害物競走などがありました。

戦前、明治神宮大会、現在の国体に相当する競技大会があって、一般及び中等学校別に色々な種目の競技が行われていました。沖縄の各中等学校からも、県大会で優勝したチーム又は個人が大会に派遣されました。しかし一般の参加者が少なく、陸上競技に1人か2人位であった。その中等学校の種目の中に国防競技という種目があって、昭和15年の大会、私が一中5年の時、出場したことがあります。その競技は手りゅう弾投てき競争、障害物競走、及び土のう運搬競技の3つに分かれていました。土のう運搬競技は、30kgの土のうを担ぎ一人100mずつ走り、5人でリレーする競技でした。私たちが参加した土のう運搬競争は、陸軍戸山学校で行われましたが、沖縄代表の私達のチームは断然速く、トップでゴールしました。しかしながら、第一走者と第二走者の土のう受け渡しの時に、誰かの膝が伸びていたとのことで、残念ながら失格になりました。その予選大会は奥武山の競技場にありましたが、私達一中のチームは、最後の走者である小生が途中で土のうを落とし、担ぎ直して走り出す間に師範チームの森田孟陸選手に抜かれて2位でした。しかし、一中チームの実力は認められて、私達のチームが神宮大会に派遣されました。なお、手りゅう弾投てき競争は二中チーム、障害物競走は農林学校チームがそれぞれ優勝し、神宮大会へ派遣されました。

司会

浦添でも見たのを覚えています。

佐川正二

俵かつぎはあったと思います。

司会

部落対抗じゃなかったわけですね。

佐川正二

私は戦前、小学校から中学校までは沖縄、その後沖縄にはいませんから、中学校と小学校のときに、浦添小学校では、運動会に字対抗の陸上競技を取り上げておりました。たぶん100mと、200m一周と、リレー、走り高跳び、走り幅跳び、砲丸も俵かつぎもあったと思います。女子は60mだったと思いますが、はっきり分かりません。リレー、それから幅跳びとか高跳びはあったと思います。そういうものを一般の人と、小学生の100mは総合点数で表して、総合得点で優勝旗の争奪戦をやっていました。

昭和8年か9年頃ですけれども、私が浦添小学校のときにちょうど安波茶と前田の、総合得点が同点になり、1位の選手は安波茶が多いので安波茶が優勝というふうに決定されました。ところが前田は、これを不服として、強引に優勝旗をもって帰ったんです。それからは優勝旗の争奪戦というはなくなりました。その他の一般の大会というのは、私達は中学生ですから、関係がないのでよく分かりません。ただ、小学校の場合に郡の大会というのがありました。私も小学校6年生で農林学校尋常高等小学校の中頭郡の大会に出場したことがあります。あれは小学校単位だったんですね。晴祥さんのお父さんの弟、盛吉さん。あの人は高等科2年生だったんです。それともうひとつ前田の人で、水産高校に行った人がいますが、2人は傍聴生だったです。高等科には傍聴生という生徒がいました。私は100mで4位だったと思います。盛吉さんが200mで、3位に入賞し、もう1人は、高跳びだったと思います。



村陸上競技大会 中央佐川正二選手 40代100mで12秒8を記録、2位浜川安英選手、3位宮城哲男選手(左)

司会

富本さんのお父さんのお話とか、或いは亡くなられた玉城幸男先生などのご活躍ぶりなどをよく聞かされました。戦前は陸上競技と武術対抗等も耳にしたことがあります、そういったのはなかったのでしょうか。武術的な競技はどうでしたか。

佐川正二

戦前は空手を習っている学生が数多くいて、一中でも正課の授業に空手が取り入れられ週に1時間空手を習いました。専門に空手を習っている学生は、村の腕自慢の若者に「カキダミシ」と言ってその上達ぶりを試されることはよくあると聞いたが武術の試合のことは聞いたことがない。

司会

戦前は村全体の大会はなく、各学校単位の大会が催されたのですね。

佐川正二

学区単位ですね、浦添小学校は浦添小学校区域で各字対抗は優勝系ですよ、争奪戦にはなっていない。

○生涯スポーツ

司会

戦前はそれ程傑出した選手というのは、あまりいなかったようですね。先ほどもありましたように、戦後、青年会が組織され、スポーツが段々盛んになって地区対抗で浦添がトップに踊り出たということですね。先ほど祐憲先生のお話によりますと、コザ地区で8年間もの連続の総合優勝が成し遂げられたというのは、これは浦添村民にとって非常に誇りになって、ますますそれを契機としてスポーツが盛んになってきたのではないかなと、こう感じます。ありがとうございました。

次に与座さんにお伺いしたいんですが、与座さんは先ほどの紹介でもお話しましたように、浦添市の社会体育指導委員のリーダーとして、

これまで市のスポーツ行事等にも関わって来ましたが、これにつきましてお話を聞かせてください。

与座武治

私は体協に関わる前は、一部は重複する期間もありましたけれども、約17、18年ぐらい体育指導委員をやっていました。体協の場合はチャンピオンスポーツ、社会体育の場合は生涯スポーツという、いわば車の両輪みたいな感じのスポーツでありますし、どちらも先ほど豊さんも言われましたように、スポーツは地域を明るくするし、活性化のいろんな諸原因の基になりますから、そういう面ではこれからもどんどん充実させていくべきだと私も思っています。



現在体協は、県民大会では19種目のチャンピオン種目があります。社会体育の面から見ますと、生涯スポーツというのは、ニュースポーツも含めてどんどん数が増えています。特に今後、高齢化社会と言われる中で、体育指導委員が勤めるスポーツとの関わりというのは、いかに市民がスポーツとの出会いをたくさんつくり、明るく健康な生活を維持させていくかということが今後の課題でもあるし、また大変必要なことだと思っています。

司会

与座さんは体育指導委員のお1人でもありますが、また市の陸上競協会長も経験していますし、現在の若い方々の陸上競技に対する関心などはどうでしょうか。また、将来への希望などがありましたら、一言伺いたいんですが。

与座武治

いま申し上げたとおり、19種目ある中で戦前とか今しがた先輩方がお話された種目の少ない時代よりも、段々種目が増えて、今後おそらくもっと増えてくるだろうと思います。その中で、種目が増えてくる分だけ、陸上競技に限らず、

若いジュニアリーダーを育てるとというのが、今後のいろんなスポーツの課題だと思うんです。特に陸上の場合は黙々と個人で日頃から忍耐強く練習しないと結果が出てこないということもありまして、年々減っていく傾向にあります。ところが、これではいけないと思います。那覇市では手っ取り早く県民大会の予選会は、各字対抗ではなくて選手権方式で選考を兼ねているような時代にきているんですね。これでは、地域の活性化は望めないです。だから、今浦添が行っている各字対抗というのは、大事にいつまでも継続してほしいことでもありますし、特にそういうふうなレールを敷いてくれた人は多くいます。佐川先生、祐憲先生、豊さん、それから玉城幸男先生、照屋喜栄さん、その他にも大勢いらっしゃいますが、運営面で忘れていけないのは現在、伊祖の自治会長をなさっている渡名喜庸功さん。氏は国際大、奥武山時代のジブシー会場の頃から本当に頭が下がる思いで彼の働きぶりを目の当たりにして見ておりました。氏の浦添陸協に残した足跡というのは、忘れてはならない大きなものがあると思っています。



沖縄国際大学のグラウンドを借りての自治会対抗陸上競技大会

司会

現在もいろいろと関わりはもっているわけですね。ありがとうございます。

佐川正二

戦前から戦後への発展をしたお話がありましたが、それに関連したことを申し上げたいと思います。

一時、陸上競技が非常に強い時期がありまし

た。特にトラックですけれども、コザ地区大会で100m、200m、400m、800m、1,500m、それから5,000m、10,000mと個人競技は全て浦添が優勝した年がありました。そのときには全員コザ地区を代表して、沖縄体育大会に出場したわけです。その時の選手は、100mに私が出ました。200mは豊元実正さん、400mは宮平次郎さん、それから800mはその弟の宮平盛吉さん、1,500mは西原清さんだったと思います。それから5,000mは宮城の仲西吉正さん、それから10,000mは島袋盛喜さんでした。

浦添は競技に強いだけではなくて、ルールに詳しい人も多くて、大会場に行き、不備な点をいつもつついていたので、役員からは煙たがられていました。ですから、実際の試合のときは、浦添の選手のしくじったところはないかと、どこか穴を探しているような感じがしました。と言いますのは、年齢別のリレーのときでしたが、私は30代、西原正次先生が40代だったんです。2人のバトンタッチでオーバーゾーンしたというふうに審判員から言われたわけです。ところがオーバーゾーンはどここのコースかと聞くと私たちは3コースを走っているのに審判員は5コースがオーバーゾーンと言うんです。そしたら、観衆の方が出てきて「浦添ではないですよ」とはっきり言ったわけです。それで助かりましたが、そういうふうに、競技役員は浦添を目の敵にして、いつも浦添の選手のルール違反を深すことばかり考えているようであった。しかし、当時は、さっきもお話がありましたけれども、本当に娯楽施設がないために競技会場には観衆がいっぱいいました。スタンドは何時もいっぱいだったんです。その観衆は浦添の選手の応援をしていて、声援を送っているのが非常に多かったんです。

司会

ありがとうございました。俗に大きな木は風当たりも強いということで、浦添のスポーツが段々盛んになって、他の市町村から羨ましくな

られ、しかも、見る目もどちらかという低いほうに味方をしようというものがあったような気がいたします。当時は陸上競技となると、たんに選手ばかりではなく、家族連れで遠くは名護まで皆で出掛けて行って、応援をしたもので、浦添の頼もしさを感じます。

富本祐憲

今、佐川先生が話された事は、1962年の頃（昭和36年）じゃないかと思います。それは浦添が8ヶ年連続優勝した頃です。今、私が持っているこのアルバムは、1962年10月14日に行われた浦添村の陸上競技大会のもので、各種目1位から3位までの表彰台に立っている選手を撮ったものですが、当時活躍した懐かしい選手達が写っています。

その中から、いくつか皆さんと一緒に思い出してみたいと思います。例えば、一般男子100mで表彰台に立っているのは、1位に下地玄二、2位松田順輝、3位新垣健といった選手です。新垣健さんは、当時浦添中学校の体育の教師でしたから、仲間の選手として出場しております。次の写真は一般男子の1500mで、1位上間精仁、2位大城義宏、3位玉城正一といった面々です。女子の100mでは1位宮平和子、2位石川トヨ子、3位島袋勝子が表彰を受けています。女子の円盤投げでは、1位島袋文子、2位銘苅清子、3位仲田成子が写っています。1位の島袋文子は、コザ地区で勝ち、全島大会でも優勝しています。

それから、一般男子の走り高跳びでは、1位前浜朝正、2位又吉政男、3位宮城正栄が表彰を受けています。一般男子走り幅跳びでは、1位前原信義、2位古謝武、3位玉城宏。30代の走り高跳びでは1位石川元康、2位富本祐憲、3位翁長宏。30代の100mでは、1位に富本祐憲、2位石川元康、3位外間廣徳が立っています。40代の100mでは、1位佐川正二、2位浜川安栄、3位宮城哲男。一般男子の砲丸投げでは、1位西原広明、2位島袋盛光、3位仲西久です。一般男子の三段跳びでは、1位石川晴祥、2位宮

城清次郎、3位には玉城勝郎と又吉清一の二人が立っています。

その他の種目もありますが、ここでは以上の事を申し上げておきます。



村陸上競技大会 中央 富本祐憲選手 30代100m (12秒5)、2位 石川元康選手(右)、3位 外間廣徳選手

○バレーボールの歴史

司会

それでは石川さん、陸上競技のお話にもありましたが、浦添のもうひとつの伝統と言えば、バレーボールがあります。歴史は長く、多くの優秀な人材も輩出しました。そういうバレーボールの流れをお話いただきたいと思います。

石川晴祥

平成7年3月に発行されました沖縄県体育協会史によりますと、昭和21年(1946年)4月14日に石川市において設立総会が挙行され、沖縄体育協会が結成されたことが記されております。



その年の9月の野球大会をはじめとして、10月には排球大会、11月には陸上競技大会、同じく11月には卓球大会と沖縄相撲大会が開催されており、沖縄を9地区に分け、出場選手は全種目とも一様ではないが、初等学校の部、高等学校、教員及び一般の部に区分されております。

昭和23年から沖縄全島を12地区に区分していた時代があり、さらに、その後大学等も一地区として参加が認められるなどの変遷を経て現在に至っておりますが、詳しいことは省略させて

いただきます。

復帰の翌年の昭和48年、第26回大会から、現在の12市郡による県民体育大会として、初めて浦添市の名前が単独で出てまいります。13種目の得点競技で行われ、我が浦添市は総合成績10位であったと記録されております。

昭和48年以前、浦添は中頭として参加していたと思いますが、バレーボールにどなたが選ばれたかよく分かりませんが、私は昭和37年3月に大学を卒業しておりますので、多分中頭代表に選ばれたと思いますが、あまり記憶に残っておりません。

司会

現在のバレーボール人口とか或いは年間行事などはどうですか。

石川晴祥

そうですね、少しさかのぼって話をさせていただきますが、私が小学生から中学校の頃ですが、玉城幸男先生、西原栄正先生、佐川正二先生方が中心になって陸上競技やバレーボール、バスケットボールの指導をしてられるのよく見掛けました。今から思いますと素晴らしいスポーツ環境であったと思います。玉城幸男先生や西原栄正先生はすでに故人となりましたが、確実に教え子達は育っていると思います。

その後は、富本祐憲先生、宮平忠一さん、日賀幹男さん、照屋喜栄さん（故人）、宮城健一さん、石川真市さん（故人）たちが、日が暮れて見えなくなるまで練習している記憶が残っております。他にも女子の選手などたくさんおられたと思いますが、お名前を覚えておりません。祐憲先生や健一先生は、バレーで国体や全国教員大会等にも出場されています。そのようなスポーツ環境でしたので、自分たちがスポーツをやるというのは、ごく自然であったように思います。私は、中学校1年生から先生方の薦めもあってバレーボールを始めましたけれども、1年生の時からレギュラー（9人制で後衛）でした。当時、特に中心にご指導された先生は棚原良

雄先生でしたが、すでに故人になりました。試合が近づくと栄養会なるものがあり、いつもそれが楽しみで、懐かしく思い出されます。その後、浦添市を代表して先輩方の後を継いだ選手は、棚原恒雄君、宮城清吉君、与那原良明君、金城進さん、義弥・和弘・政和君たちの川畑兄弟、私もそうですが、特に棚原君、宮城君、与那原君、川畑君は国体や全国実業団大会等にも幾度も出場をしております。

12市郡になる前にも本市は何度か地区大会においては優勝したように思いますが、詳しいことは分かりません。現在の12市郡大会になってからの成績は、県体協史に詳しく出ておりますので割愛しますが、男女アベック優勝するなどの活躍があります。

それから、県内における大会であります。教員の学校対抗や実業団大会が盛んに行われておりました。教員大会は現在は影を潜めておりますが、競技の普及や健康・体力の向上はもとよりお互いの交流などにも大変有意義であったと考えております。沖縄の実業団バレーボールの普及発展には、棚原恒雄君や与那原良明君、川畑兄弟の果たした功績は極めて顕著なものであったと思います。

司会

沖縄は、先程申し上げたバレーボールで国体に復帰前から参加しているわけですが、石川さんや富本先生などは沖縄代表として参加して、本土とのレベル差はいかがでしたか。

富本祐憲

私が国体に参加したのは、第13回富山国体のときでした。その当時は、復帰前ですから、パスポートを持たないと行けませんでした。私は、教員団の9人制バレーボールの部に出場しました。当時、浦添でも教員団チームを編成して、県大会へ出たりしていましたが、メンバーとしては、西原正次、玉城幸男、西原栄正、仲座方信、垣花泰竹、福山朝秀、宮城健一の各氏が主となる選手でした。沖縄での大会では常に上位

にありました。平安座教員団チームが県代表で国体に出場していましたが、私は補強選手の一人として平安座チームに加わり、国体に参加しました。補強選手には私の他に、大城盛三、久場長哲、城間辰己の各氏も居ました。国体の成績は、ベスト8だったと記憶しています。



富山県対沖縄の試合（手前左が富本選手）
写真提供：富本祐憲氏

石川晴祥

私が国民体育大会に初めて参加させてもらったのは、琉球大学3年で昭和35年の第15回熊本国体であります。当時、平安座教員時代から琉球大学が県内の総合選手権大会や地区大会などで勝てるようになっておりましたので、琉球大学を中心に外部から沖縄電電公社の仲井間弘武君を補強して一般チームとして参加しました。

私をはじめ殆どが初めての県外遠征だったと思います。出発前から日本鋼管が日本一のチームであることは聞かされておりましたが、熊本入りする前に宮崎県にある旭化成チームに特別指導を受けたことや、日本一のチームがどれくらい強いかわからない状況であったことが、無心で試合に臨み、終わって見れば勝っていた



第15回熊本国体で強豪日本鋼管チームを破る。
沖縄一般男子チーム 石川選手の力強いスパイク

と言うことであり、自らもびっくりしたものであります。

本土のレベル差についてですが、コーチの外間先生（琉球大学教授）は、出発前から20年くらいの差があると言われていたのを10年くらいにしたいと言っておられました。

しかし、近年は小学生がライオンズカップでの全国優勝、中学生男子は昨年（2002年）の九州大会において沖縄県同士で決勝戦を行ったこと、高校男子の全国大会において何度かベスト4になるなどの活躍があります。古いところでは、昭和46年第26回和歌山国体において教員男子が3位になっており、海邦国体以前と比べればかなりレベルアップしたと言えると思います。特に、海邦国体後の9人制バレーボールの全国大会においては、沖縄銀行男子チームが15回くらい、中部徳州会チームが優勝するなどの大活躍があります。また、女子の部では琉球銀行が独自のチーム編成等を行っての海邦国体はもとより全国・九州大会における活躍も特筆に値するものであります。

○スポーツ施設とハンドボール王国浦添の歴史 司会

それでは次に、東江さんにお話を伺います。ハンドボールのお話をいただく前に、現在体育館のほうに勤務しておりますので、ちょうどいい機会ですから、浦添のスポーツ諸施設についてまずお話を聞き、さらに、市民の利用状況などをお話いただけたらありがたいんですが。

東江正作

浦添市のスポーツ施設ですけれども、運動公園にはほぼ8・9割集中しております。まず最初に完成したのが陸上競技場で、昭和59年に供用開始というふうになっております。市民体育館が昭和62年の国体に合わせて一部供用開始になって、続いて野球場、市民球場として



平成8年にこけら落としをしてあります。平成10年に屋内運動場が完成し、その後体育館の一部供用開始がアリーナだけでしたが、平成9年に武道場が完成しております。

平成9年から10年にかけてほぼ運動公園として大まかな施設が完成をしてあります。ご承知のように、運動公園内、或いは陸上競技場周辺では毎朝5時頃から夜12時ぐらまで、ひっきりなしに市民の方がジョギング、ウォーキングなどに利用されています。この光景は他市町村の方が視察等に来たときには、大変びっくりされています。立地条件の良さ、或いは使いやすさというのがひとつの要因かなというふうに考えますが、たまたま利用状況調査を1週間実施したところ、利用者の4割は市外の方でした。そういう状況で陸上競技場に関しても、もの凄い利用がされていまして、朝6時頃いきますと既に100人ぐらいの方がジョギング、ウォーキングされております。夜も10時に照明が消えるんですけども、その後にもまだまだ人がいるというふうな状況です。

それと体育館ですけれども、体育館のアリーナでは、今一番盛んに行われているのがバドミントンです。コートが12面取れ、夜になりますと全面バドミントンで埋まることもあります。また、その他には伝統的なバレーボール、ハンドボール、最近ではインディアカというスポーツがずいぶん盛んになってきていまして、こういったものが今アリーナでは主に行われているというところです。武道場につきましては、剣道がもの凄く盛んで、少年剣道は週2団体、また一般の方の剣道の稽古、或いは伝統的な空手も随分利用されていて、来てすぐに利用ができるというような状況ではありません。

この2、3年、柔道場の方も随分利用されていまして、柔道だけではなく、合気道や他の武術が入ったりと、大変上手く利用されているのが現状です。多目的屋内運動場ですが、プロ野球のキャンプのときには、1ヶ月間ヤクルトの

キャンプで利用しております、それ以外の11ヶ月については、主にテニス、野球の練習、フットサルというんですか、室内サッカーというので毎日利用がされております。屋内運動場もまた、他の市町村から視察にこられた方が、利用のされ方を見てびっくりしているというのが現状です。

司会

どうもありがとうございました。お話によりますと、現在もスポーツ施設が多くの方に利用されているとお話です。

それでは本来の専門のお話を聞かせていただきますが、沖縄におけるハンドボールが歴史的にはそう古いとはいえないと思いますが、浦添の小中校生の活躍は全国レベルに到達しております。そういった歴史的なものを少し述べていただけますか。

東江正作

歴史的に言いますと、県協会が昭和40年の7月1日に発足されてから、まだ約35年しかありませんんですけども、昭和40年代といいますと沖縄のハンドボール界にとりましては、県外のインターハイ、中学生大会等では対戦相手からすれば、良いお客さんというふうにとられていて、その頃の指導者の先生方というのは、陸上やバレーボール専門の先生が、ハンドボールの指導に携わっていて、それが昭和50年代に入ってから、海邦国体の誘致が決まる前後あたりから徐々に競技力が上がってきました。あとで実績も延べさせていただきますけれども、今では全国でもハンドボールと言えば沖縄、沖縄のハンドボールと言えば浦添というぐらいに有名になっておりますけれども、その間には素人の先生方の大きな力がございました。ハンドボールの経験をした方が今度指導者として戻ってきて、現在に至っております。

司会

ハンドボールが35年という短い期間の間にかかなりの実績を残しております。宮城勇さんとかが



第42回国民体育大会（沖縄海邦国体）の青年男子沖縄県チーム（ベスト4に輝く） 写真提供：東江正作氏

或いは又吉栄久さん、東恩納さんあたり等、先輩方が築いた実績を非常に大きく感じます。それでもなお現在、小学生、或いは中学生、高校生が、先ほど申し上げたように、沖縄県内での大会でベスト四に残った4校とも浦添市内の子どもたちが活躍するという状況ですが、その要因となっているのはなんであるかを少しお話しいただきたいんですが。

東江正作

今お話にありましたように、宮城勇先生、或いは又吉栄久先生、東恩納先生、あとは小学校では保栄茂朝信先生という方々の地道な努力と熱意でどんどん競技力が高まっていきました。

まず最初に全国制覇をされた、又吉栄久先生が昭和56年に、全国初の中体連の優勝ということで、その後急速にそれに触発されて男子も女子も或いは高校生も全国優勝を遂げるようになりました。栄久先生のもの凄い熱心な指導が実りまして、東恩納先生もその影響を受け、中学校では、その後に出てきた名護清和先生がいるんな勉強をしながら、浦添中の女子を全国制覇に導き、神森中が1997年に2度目の全国制覇を成し遂げました。まだ記憶も新しい昨年には男子仲西中学校が地元で行われました全国中学生大会において優勝、港川が3位、それで男女の浦西、女子の仲西が3位と優秀な成績を残しています。ひとつには小学校の指導者のたゆまぬ努力があったんじゃないかと思います。

小学生の指導者の方は子どもたちと一緒に

なって中学生の試合を見学に連れて行き、自分の中学校区の応援をしながら、レベルの高い試合を見て、それに見られているという選手がまたハッスルをしますので、自然にいいプレーができ、今度はその中学生たちは自分たちが進みたい高校生の試合を間近に見て、その繰り返して、見られて上手くなっていく、期待されて上手くなっていくというもので、競技力が上がっていったんじゃないかと思います。もちろん指導者の技術的、精神的なもの、或いは栄養学的、生理学的なものといったものも含まれていますけれども、土壤にあるのは、幸いなことに浦添市民体育館で2コートとれますので、そこに小中高とひとつの器の中で、小学生、中学生、高校生といったところが一緒になってプレーを見る、やる、そういった環境が整っているというのが一番大きな要因ではないかと思います。

敵の包囲網を潜って華麗なるジャンピングシュートを
をす東江選手



（沖縄海邦国体時）

○ウエイトリフティングの第一人者 司会

どうもありがとうございました。数多くの実績を残しているハンドボールのことにつきまして、東江正作さんにお話を聞かせていただきました。それでは比嘉さん、大変長い間お待たせいたしました。沖縄の人は昔から空手、ボクシング、或いはウエイトリフティングと、わりと

体系的にはあっているのか、最近ではすばらしい実績を発揮しております。沖縄の選手や浦添市内の選手層などについて、比嘉さんにお話いただきしたいと思います。

比嘉敏彦

沖縄県の選手層においては、那覇、島尻地区の学校が多く、お互いに合同練習を多く取り入れ、トレーニングの仕方、栄養面等の情報交換が頻繁に行われているため、相乗効果が大きく、全国トップレベルの選手が多いです。特に、ここ5年間は本当にめざましい記録向上があります。例えば全国高校チャンピオンが県内から4人も出ました。しかし、国体の県代表枠は3人ということで、その選抜に大変な苦悩がありました。全国の上位を占めることよりも、県代表になるということが、難しいという状況です。そのぐらい県内のウェイトリフティングのレベルは高いということがいえます。しかし浦添市内においては、ウェイトリフティング部がある高校はひとつしかありません。そのため、合同練習が少なく、残念ながらレベル的に少し下がっています。しかし、浦添市内生徒は体力的にも素質的にもレベルが高いので、早く指導者と環境整備等が整えば、凄い選手が出てくると思います。いろいろな諸先輩方の助言もいただいて、早く指導の先生方を配置していただけるようにするのが課題だと思っています。

司会

個人的なことに立ち入るようですけれども、比嘉さんは先ほども紹介のときに申し上げましたが、当初は陸上競技をなさっていて、確か興南高校に入ってから、ウェイトリフティングに転部、後に、その功成りて日本を代表する名選手になったわけですが、そういったきっかけなどお話しいただけますか。

比嘉敏彦

まず、中学生の頃の話になりますが、その頃



はバレーボール競技を行っていました。それが、たまたま中体連の陸上競技に砲丸投げの選手として選ばれ、大会に参加したところ、沖縄県内で3位になり、おかげさまで興南高校に進学することができました。興南高校に入り、陸上競技において筋力アップを図るトレーニングを行いたいと思い、奥武山体育館、現在の県立武道館で筋力トレーニングをおこなっているときに、元日本代表のオリンピック選手である平良朝治さんとの出会いがきっかけでウェイトリフティングに転向することになりました。当時はいろいろ悩みましたが、平良朝治さんに、「お前なら日本一になれる」という言葉をいただき、この一言にウェイトリフティングでやっていくんだという決心をしました。平良朝治さんの一言一句を逃さないように本当に一生懸命頑張りました。平良さんの教えに、「全国はもっとやっている。自分が思っているよりやっている。与えられたメニューをこなすのは誰でもできる。その後どのようにして自分でやっていくか」ということをいわれ、もっとやらないといけないんだと思い必死でメニューをこなす一方、別メニューを考え実践しました。それでウェイト転向4カ月目で全国選抜大会3位、インターハイ優勝、国体では日本高校新記録を出すことができました。平良さんの指導のおかげで、自分は陸上競技では沖縄県のレベルで終わる選手だったのですが、ウェイトリフティングでは、全国大会のレベルに引き上げていただき、本当に感謝しています。人との出会いがこのように自分を変えさせてくれたというのはとてもよかったです。また、こういった経験を活かして法政大学に進学し、1・2年生のころは雑用係でいろいろ伸び悩んだこともありました。3・4年生になり、はじめて全国大学対抗戦に出場させていただき日本新記録を樹立、また日本を代表とする選手までに成長することができました。それも、皆さん方の助言と励ましがあったからだと思います。自分が国際大会等で経験したこ

とを、1人でも多くの生徒に伝え、ウェイトリフティングの魅力を指導していきたいと思います。



沖縄県代表で国体に参加した時のスナッチの様子
写真提供・比嘉敏彦氏

司会

是非、後輩の指導にあたられて、次々と沖縄の子どもたちが日本一、世界を目指して頑張ると同時に比嘉さん自身の活躍を期待します。

ウェイトリフティングは県民大会でも浦添では大きな得点源にもなるんですが、将来に向けてという選手層あたりはどんなでしょうか。

比嘉敏彦

先ほども話したのですが、浦添市内には指導者が少ないせいか、選手層も低いですが、今いる選手でも日々練習に取り組んでいます。県民大会の団体ではここ最近2位ばかりですが、今年は優勝を目指して頑張っていきたいと思っています。また浦添市内から選手発掘、選手育成をして、どうかオリンピック選手を出していきたいと思います。今後ともご指導のほどよろしくをお願いします。

司会

どうもありがとうございました。1時間と30分近く経っておりますが、そろそろ終わりに近づいてきておりますが、若い頃に携わってきたそれぞれの分野での苦労話や或いはエピソードなどがございましたらひとつお聞かせいただきたいと思いますが、宮城さんどうでしょうか。青年会活動の中で何か。

宮城豊

戦後の青年会活動は本当にあるのかなのか分からない状態だったので、おそらく私はあの当時、又吉村長から指名されて会長になったんじゃないかと思うんです。そして、スポーツを導入したのは、あくまでもその青年会組織を強化し、団結を図ろうというのが目的だったと記憶しています。しかしながら、スポーツは盛んになったけれども、肝心の青年会組織は盛り上がり欠け、そのうえ会長の成り手もなく、私は昭和29年に会長を退いたんですが、後継ぎがいなくて、ちょうどあの時に垣花泰竹さんの取り計らいで、会長名のないめずらしい感謝状をもらいましたよ。それは今でも家の中に飾っています。

司会

どうですか、佐川先生。何か陸上競技での苦労やエピソードがありましたら。

佐川正二

終戦直後の、物のない時代、もちろん食べる物も、着る物もろくにない時代ですが、軍服みたいなものしかないでしょう、それを直して自分のものにし、走るためのパンツも、スポーツ店があちこちにあるわけじゃないですから、サポーター等も自分でつくらないといけないときでしたから、苦労はありました。また、当時は食べ物さえ満足にない時代ですので、競技をしている人たちがよく病気したものです。仲座方信君や比嘉弘君が病気したときには、僕が病気したとしたら浦添の陸上競技をする人は誰もいなくなるというも考えて病気をしないように心掛けていました。疲れたときは、少し休んだりして、いつも体のことに気をつけながら練習をしていました。一番大きな苦労はそのことだったと私は思います。

司会

佐川先生、これまでずっと各自治体対抗で参加チームの数を見ますと、復帰の前後5年ぐらいがちょっと下降気味なんですよ。12、

13チームぐらい。どうしたんでしょうね。例えば他の、この魅力のあるような種目がたくさん出てきたとか。47年前後の5カ年間、10年ぐらいですね。その後はまた20チーム近く増えていきますけれども。

佐川正二

村の時代、字対抗で競技は行われたが、字の数は16しかなく、その中で人口が少ないとか競技に関心が薄いとかで不参加が幾つかあった。また、市になり、自治会対抗で行うようになって、体協は一時解散したことがあり、再建間もない頃は、体協と各自治会との連絡が充分でないため、参加数が少なかったと記憶している。

司会

他に何か、石川さんどうでしょう。

石川晴祥

本市におけるバレーボールの競技団体としての組織化についてですが、昭和54年に家庭婦人、昭和56年にOBバレーボール連盟、そして昭和57年に小学校バレーボール連盟が関係者のご努力で設立されております。そして、浦添市が海邦国体においてバレーボールの会場地に決定されたことを機会に、県バレーボール協会のご指導を受けて、昭和58年には浦添市のバレーボールの総元締め役を担う浦添市バレーボール協会が設立され、現在に至っております。

県バレーボール協会40年史（平成6年3月発行）には浦添市バレーボール協会の結成に至るまでの歩みや市バレーボール協会の初代会長が西原栄正先生であったことなどが紹介されております。



若草チーム（浦添）昭和53年第9回全国家庭婦人バレーボール大会で準優勝。名セッター中田美智子さんを中心にまとまったチームメイトは今尚70才めざして生涯スポーツとして続けている。

司会

それではこの記念誌発行部の部会長は、与座武治さんになっておりますので、与座さんに記念誌が発行される日付と内容などについて、少し説明いただけますか。

与座武治

これはまだ最終的に100%決定というわけではないんですが、方向性としての考え方はまず、サイズはA4版、ページ数は約300ページぐらいになるでしょう。19種目の専門種目がありますので、各専門部の歴史とか沿革、いろんな歩み等を平均6ページにしますと約200ページになります。今日の座談会や、浦添市のスポーツにいろいろ貢献された方で出席できなかった人の回想録を若干名。それに県民大会の流れ、写真。他に資料編がありますので、昭和28年から平成15年まで、浦添体協の歩みと県内の動き等掲載すると約300ページになると思います。

司会

ありがとうございました。あつという間に時間が過ぎてしまいましたが、最後に、出席された皆さんにひと言ずつ、浦添市の体育協会や各種競技団体などについてのご意見とメッセージがありましたら、それをお伺いしてから終了したいと思います。

それでは東江さんいかがですか。

東江正作

ハンドボールの方は、全国から非常に注目されていまして、今、逆に日本ハンドボール協会の方から沖縄の小中高の指導体制についてどうなのかが問われていて、そのことで私は来週日本協会の方でミーティングに参加するんですけども、そういった現状に満足することなく、一環指導体制を確固たるものにして、今後は更なる発展を遂げていければと思っております。

司会

頑張ってください。

与座武治

私は、浦添の人口が将来、この面積からする

と15万人ぐらいに増えるだろうというふうに予想しています。そうしますと、まだまだスポーツの需用というものはたくさん出てくるだろうと思いますが、特に施設面の不足が多々あります。例えば、一番、目に付くのは、県民大会を浦添が中心になって催すことができません。陸上競技場は整備されたわけですが、例えばラグビー、サッカー、それに将来は体操や水泳も含めて県民大会の種目になる可能性は出てきます。その辺の施設がまだまだ不十分ですので、今後は長い目でこの施設面の充実を考える必要があるだろうと思います。

司会

ありがとうございます。佐川先生、いかがですか。

佐川正二

施設のお話がありましたが、戦前は市町村の財政が、どういう状態にあったかよく分かりませんが、そういう関係もあって、施設が少ないとか、悪いとか。あまりスポーツに適した環境が少なかったということも或いはあるかもしれませんが。しかし、最近は何の市町村に比べても、浦添の施設は整ってきたという気がします。グラウンドも何時でも自由に個人で使えるようになっている。だけど、戦後の施設もない時代にあれだけ盛んだった浦添の陸上競技は、段々下火になっているような気がします。もう少し陸上競技を盛り上げることはできないかと思っています。競技場で練習しているのは、年寄りが多く、若い人が少ないように思えます。小中学生の陸上競技を盛んにするための方法として、そういったら失礼な言い方かも知れませんが、陸上競技は個人競技で、球技だったら楽しみながら皆集まって練習ができるのですが、陸上競技はそういうことにはいかないのです。どこに楽しみを見出すか、記録を伸ばすとかそういうところに楽しみを見出して練習する、自分との戦いだと思います。自分に勝てるような子どもたちをつくっていくということが大切で

はないかと思います。そういう意味で小学校、中学校の競技を、もっと盛んになるようにしたらどうかという気がするのですが、それには指導者ひとつをとっても課題は山積みされています。

司会

宮城さんいかがですか。

宮城豊

今の生活環境がかなりよくなりまして、なかなかその練習をしてどうするかというふうな意欲が、昔に比べて非常に欠けてきたということがあります。だから、スポーツを振興していくためには、何といたっても競争意識を高めるということに尽きると思います。競争意識を高めるためには、どのスポーツでもそうですけれども、優勝した者、或いは新記録を出した者を広く市民に知らせること。浦添広報がどうなっているか分からないけれども、どのようにして良い成績を挙げたのか、ということを知ることが分かるように、それに対して関心を持てるように広報活動を強化すること。

それともうひとつは、どれだけそういった面に資金が投下されているか分かりませんが、勝者へのインセンティブをもう少し厚めにやったらどうか。優勝したチームにはそれ相応の、商品をあげられたらいいなと思うんです。そうするとかなり意欲が出てくるんじゃないでしょうか。

司会

宮城さんらしい発想ですね。優勝者は海外旅行券のプレゼントとかね。確かにおっしゃるとおりだと思います。

宮城豊

このことについては、市からもう少し援助してもらおうとか。

司会

大変ありがたいアドバイスありがとうございます。富本さんいかがですか。

富本祐憲

記念誌を編集するにあたって、希望したい事の一つは、市内の各自治会に呼びかけて、昔の写真を集めて記念誌に取り入れてもらいたいという事でありませう。

今私がここに持って来た30年程前の陸上競技大会の写真ですが、これは表彰式を写しているんですけども、後方には、何百人もの観衆が写っていて、当時盛大に催されていた様子が伺えます。今、小湊の自治会では、宮平忠一さんが中心となって、字誌の中のスポーツ編を編集していますので、小湊との情報交換をするとよいと思います。

司会

石川さんいかがですか。

石川晴祥

反省ということで、先ほど東江さんがハンドボールの話をしておりましたが、ハンドボールは県から浦添が地域指定を受けていたと思います。それは小中高校、一般というふうには、優秀な指導者か或いは指導者の連携とか、それから合同での練習をするなど強いハンドボールを作り上げる素地が出来上がっている。

先ほども全国から注目されているということがありました。今後、他の競技でも、強くなっていくためには、そういった一貫指導ができるような態勢を作り上げていくことが、大切だと思います。小学校、中学校、高校では専門的な

指導ができる先生が少なくなったと言われておりますので、外部の指導者をもっと活用することが大切になると思います。そういう意味で“ハンドボールの指導体制に学べ”というようなことを私は申し上げたいと思います。

司会

それでは最後に比嘉さんからひと言。

比嘉敏彦

競技レベル向上において、自分ができることと言えば、ウエイトトレーニングの指導及び大切さを伝えることじゃないかと思います。是非そういう場がありましたら協力して、浦添市の競技力が全体的にレベルアップできればと思っていますので、協力させてください。よろしくおねがいします。

司会

ご協力いただきまして、ありがとうございました。ひとつひとつが浦添の歴史をたどって来たような気がします。きっと、後輩の皆さんがこれを糧として、今後の浦添のスポーツ技能の向上、或いは底辺の拡大につながるものと信じます。

本日は、いろいろと長い間お付き合いいただきまして、ありがとうございました。

注記：特別座談会は平成13年7月1日に実施されたものを収録整理していますが、記念誌発行までの期間に新たに発生した出来事についても加筆しています。



座談会終了後に記念写真。お疲れ様でした。